

第1回 SPARC Japan セミナー2015

「学術情報のあり方—人社系の研究評価を中心に—」

開会/概要説明

駒井 章治

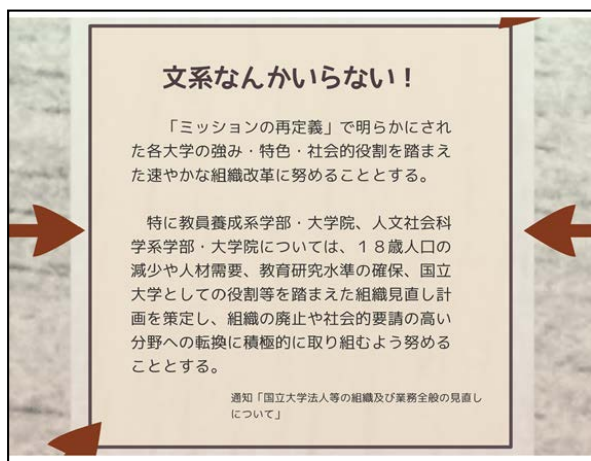
(奈良先端科学技術大学院大学)



駒井 章治

2008年より奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授。1993年上智大学卒業（心理学）、1997年奈良先端科学技術大学院大学修士課程修了、2000年同バイオサイエンス科博士課程修了。神戸大学医学部、マックスプランク医学研究所にてPDフェロー。2011年より2014年まで日本学術会議若手アカデミー委員会委員長として活動。現在、日本学術会議会長アドバイザー、JSTサイエンスアゴラ推進委員会委員、内閣府・科学技術イノベーションの戦略的国際展開に向けた検討会委員、Science Talks委員。

昨今、「文系なんかいない！」という印象的な記事が世間をにぎわしています。私は企画担当として、これにインスパイアされて今回の企画を考えました。そもそも文系という分け方が正しいのかどうか、文系がいないのではなく、もう少し違う見方があるのではないかということから議論をしていきたいと考えています（図1）。

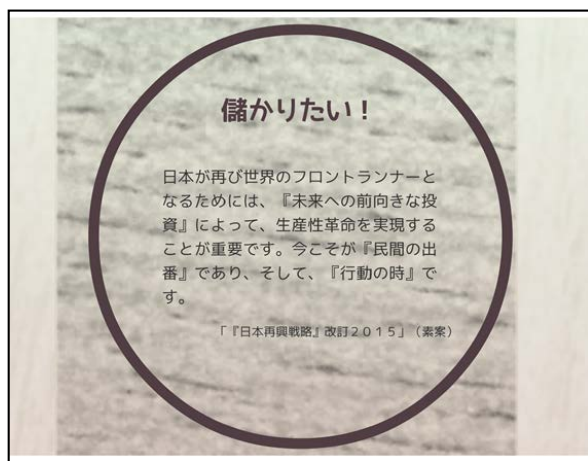


(図1)

なぜ文系はいらないと言われるようになったか

経済活動が頭打ちになってきて、日本全体のアクティビティもシビアになっている現状で、どうしたらいいのかということが、そもそもの問題意識だと思っています（図2）。国の儲かりたいという思い、私たち自身の社会生活が豊かになってほしいという思いがモチベーションだと思っています。

そんな中、「ちんぷいぷい」のキーワードが出てきました（図3）。イノベーションというやつです。



(図2)

何がしかのすてきなものを生み出してくださいというキーワードが出てきて、それに伴い、出口主義が根付いてきました（図4）。出口から見た研究だけではなく、出口を見据えた研究をしっかりと考えてやってくださいという方向に進んできました。

一方で18歳人口は減少し、社会生活を動かしていく実際の人数は減ってきています（図5）。この問題をどうしたらいいのかということとともに、大学の評価のあり方が取り沙汰されています。Higher Education Ranking というものが出てきて、これが本当に正しいのかどうか良く分からない状態で一人歩きした形で、大学ももっと頑張ってもらわないと困るという話になりました（図6）。

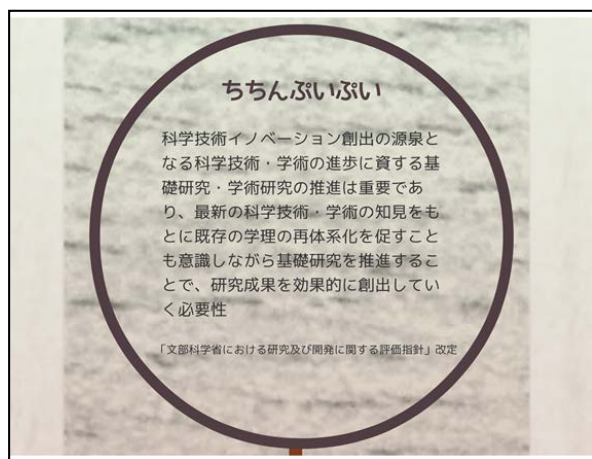
評価の必要性

その中で、文系のあり方というのもしっかりと考えな

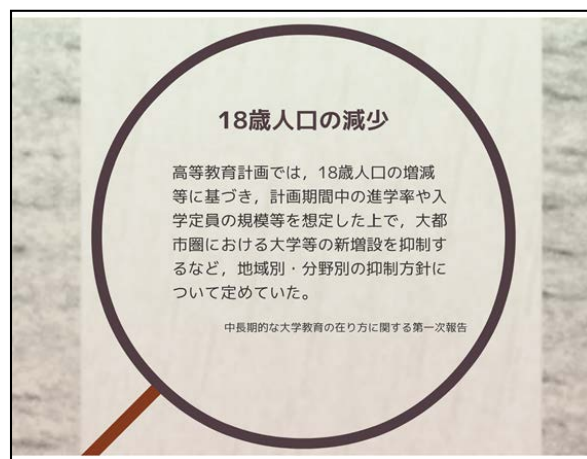
ければいけません。私は学問的な優劣はほとんどなく、学術はいろいろなものがあるべきと考えています。ただ、野放しも問題で、ある程度の評価はやはり必要です。どういう仕事面白くて、どういう仕事はあまり評価されるべきではないのかはしっかり評価されるべきではないでしょうか。それは人文社会に限らず、理系や工学系においても同じだと思います。それについて、先生方にさまざまな事例をお話いただき、後にパネルディスカッションで議論したいと考えています。

本日の流れ

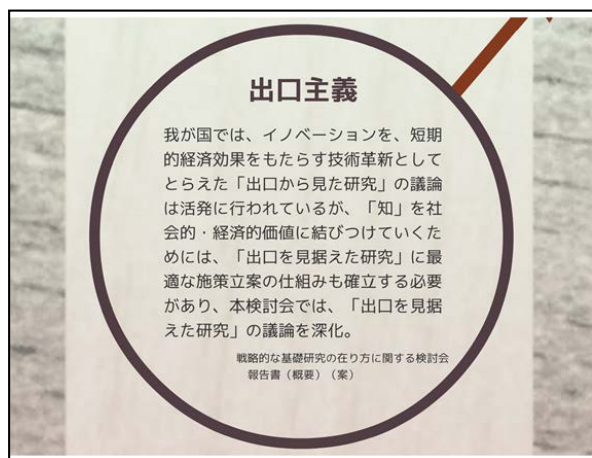
初めは中尾先生から、科学哲学という視点で、人文社会にとどまることなく、理系の学問体系としての評価についてお話しいただきます。野村先生には、社会科学や政治学、環境学の観点からご議論いただきます。



(図3)



(図5)



(図4)



(図6)

永崎先生には、人文系、特に古典をご専門にされている観点からご議論いただきます。中村先生には、研究不正に関してご発言されている立場から評価の多様性についてお話しいたします。日本の事例はこの4名の先生方にお話しいただき、英国の事例は佐藤先生にご紹介いただくという流れになっています。ぜひ忌憚のないご意見をたくさん頂ければと思います。